特集 英語を使う技能の育成

ことばを使う実感を持たせる活動

今井裕之（兵庫教育大学）

USE IT について

教科書のコミュニケーション活動に何を望むだろうか。文法や構文の定着，それを使った自己表現活動，そしてより自由で即興的な表現活動など，多様な要求があるかと思う。2006（平成18）年度版 *NEW CROWN*（以下，*18NC*）は，CHECK IT，USE IT，DO IT とそれぞれの目標ごとに活動を分け，生徒も教師もステップアップを実感できるように言語活動がデザインされている。

USE IT は CHECK IT と DO IT の間に位置する活動である。CHECK IT は文法事項の定着を目指したドリル的な発話活動であり，DO IT は LESSON のテーマ，対話の型，言語のはたらきなどを軸に作られた本格的な言語活動である。その両者をつなぐ USE IT は，文字通りことばを「使う」活動であり，「通じた・わかった！という，ことばを使う実感」を生徒に持たせる第一歩の活動と言える。

3年生の LESSON 7 を例に見てみよう。第1セクションのPOINTは，Tom wanted me to take pictures. という want ＋人＋ to do という構文だが，現行版の LET'S COMMUNICATE では，「友だちと対話をしてみよう」という課題を与え，絵の内容に従って，例えば I want you to show me your book. のように，例にならって言わせる活動が3つ続き，最後の4つめで「あなたのしてもらいたいこと」を考えさせ発表させる活動になっている。3つめまでは絵のガイダンスのもと，ドリル的な要素を意図した練習であり，4つめで「自己表現」をさせる，ドリルと自己表現を統合した活動デザインであった。

一方，*18NC* の USE IT（右コラムの例）では，定着ドリルは，CHECK IT で済ませ，ことばのはたらきに焦点をあてた自己表現を実感できる活動に集中できるようになっている。指示文によって，ことばを使う状況と課題を与えることで，Ms Shimada wants us to get up at six. のように，「第三者の依頼を伝聞的に伝える」という明確なことばのはたらきを生徒が実感できるよう配慮している。また，起床時間，昼食のプラン，午後の活動，就寝時刻と，日程の説明としての文脈を持たせることで，ともすれば脈絡のないドリルに陥りがちだったものを「話している実感」を持てる活動に仕立てた。

自己表現活動とは，ドリルのあとに，「あとは自分で言いたいことを考えて」と課題を丸投げすることではない。ことばを使う状況やことばのはたらきを生徒が実感・体感できるよう活動をお膳立てすることで，表現の第一歩を踏み出せるようあと押しすることである。

ことばのはたらきや使う状況を実感させる活動を成功させるためには，ことばと1）誰が，2）誰に対して，3）どんな意図・目的ではたらきかけているかの3点とのつながりが明快で，それを自然に理解・実感できるようデザインする必要がある。この点について *18NC* では，「先生」が「わたしたち」に「依頼，指示する」ことを「留学生に伝える」と

USE IT 7
LESSON 7
1 キャンプで何をする？
あなたは今キャンプに来ています。島田先生の話している予定について，例にならって日本語に苦労している留学生の友だちに説明してあげよう。
例 Ms Shimada wants us to get up at six.
今日のスケジュール
●6時起床
●昼食にカレーライスを作る
●昼食後，公園の清掃
●10時就寝

いった具合に，言語形式とことばのはたらきや状況が自然に馴染むよう改善している。このように各セクションの POINT を，実際にそのことばを使う人，応じる人，場面やはたらきを考え，できるだけ身近で，楽しく，自分のことを知ってもらえる，相手のことがわかる活動を今回のコミュニケーション活動は目指している。

USE IT は意味のある対話・自己表現を目指す

たとえば，過去形を使えるようになると，表現力はグンと増すものだ。一度，現在形のみで同僚と話してみてほしい。What kind of sports do you like? など個人の嗜好を話したあとは話題が続かなかったり，続けようとすると一般論，抽象論になってしまったりしないだろうか。知り合い同士ほど過去の経験を共有したくなるはずだ。初期の学習者も同様で，話しやすい身近な話題ほど過去形は欠かせない。

しかし，過去形で話すためには，センテンスレベルで話すことが要求されるし，私たち自身の経験からもわかるように，過去形 ed は落としてしまいがちである。中学 2 年生には，相当難しい課題である。だからこそ，CHECK IT の徹底した「型」の訓練が大切なのだが，これは昔のパターンプラクティスへの回帰ではなく，訓練活動とその成果を生かした表現活動 USE IT とを組み合わせることで「言語の型」と「発話の意味」をつなぎ発展させたところに意味がある。CHECK IT と USE IT を分けたのは，各々の目的を明確にするためではあるが，両者は互いを補い合う関係なので，できるかぎりセットで使っていただきたいと思う。

USE IT は自己表現を活動デザインで重視しているが，田中武夫・田中知聡は，『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』(2003, 大修館書店) のなかで，自己表現意欲を促すポイントとして，1）必然性，2）具体性，3）自己関連性，4）自由度，の 4 要素の大切さを強調している。必然性，具体性とは，実際にことばを使う実感に即して言えば，前述の 1）誰が，2）誰に対して，3）どんな意図・目的ではたらきかけているのか，と同じことで，USE IT でもこれを重視している。自己関連性や自由度は DO IT との共有課題である。さらに田中らは，生徒の自己表現能力を支える要素として信頼感，感受性，想像力をあげているが，これらは，生徒にインタラクションさせる際に細心の注意を払うポイントである。

インタラクションの際には，ドリルには必要のない「受け手（応じ手）の存在」が大切な役割を果たす。対話の相手から感受性，想像力を刺激され，信頼感を築くことは，コミュニケーションそのものとは言えないだろうか。時々授業では，生徒たちが「言いっぱなし」の空振りを強いられるような，受け手のいない言語活動が見られる。パターンとしては，答えの決まった質問を教師に投げかけられ，正解を出すプレッシャーに苦しむ「行き止まり（dead end）パターン」や，自分の発言に対して相手（教師）の応え方がたいてい同じ（Good! などの評価コメント）「壁打ちパターン」があろうか。CHECK IT ならば，壁打ちも，空振り（素振り）も意義はあるのだが，USE IT は，インタラクションを通じて自己表現，大げさでなく「自分を賭けて相手にゆだねる」ことを含む活動であるがゆえ，教師は生きた対話者として生徒を受け止めるべきである。それが活気につながり，なにより受け手の教師自身がコミュニケーションを楽しめる。

自分のことが言えるようになる中学生

今回の改訂で「リズミカルなエクササイズ」と「自己表現につながる活動」を分けたことで，より自己表現に集中して取り組める活動になったと思う。

もちろん私たちは教室での生徒の言語活動を評価しなくてはならないので，「できたか，できていないか」を判断しやすい，答えの決まっているクイズ的活動も取り入れており，すべてが自由な自己表現へと開かれているわけではない。しかし，USE IT が目指す，話し手・応じ手として，ことばを使う実感を大切にし，その第一歩を生徒に体感させるという目的は大切にして欲しいと思う。自分のことが言えるようになるまでには，知識の積み重ね，訓練の積み重ねも必要だが，何よりも，ことばを使えた小さな実感の積み重ねが生徒の息の長い学習を支えるのだと言えないだろうか。